

展 望

家族心理学研究の動向

岡 堂 哲 雄

(文教大学人間科学部教授)

はじめに

家族心理学は、1980年代になってようやく確立された、心理科学のなかでもっとも新しい分野である。心理学関係者の間においても、家族心理学は十分に膾炙してはいないと思われる。『教育心理学研究』誌に本稿〔家族心理学の成立から今日までの経過と今後の展望を含む研究動向〕を執筆することができることは、時宜を得たものであって、この機会を提供された関係各位に深く感謝申し上げたい。

本稿では、最初に家族心理学の課題と近接領域との関連について述べ、次に家族心理学の成立過程を検討し、おわりに欧米とわが国における家族心理学研究の現状と展望を記述することにした。

1. 家族心理学の課題と近接領域との関連

心理学史を顧みると、心理学はおおむね個人の心理あるいは行動を解明しようとしてきており、家族に関心を示すことは概して少なかった。家族関係を取り上げる場合でも、個人に影響を及ぼす要因の1つとみなす程度であった。たとえば、発達心理学の分野では、研究対象は最初、子ども自身であったが、次に母子関係に注目するようになった。近年ようやく、父親が子どもの発達にとって重要な役割を果たしていることに気づかれるようになってきた。さらに、最近になって、同胞関係や祖父母との関係が研究の対象に加えられるようになった。かくて、家族全体を1つのシステムとみなし、研究対象とするようになったのは、ごく最近のことである。錯綜した家族関係を研究しようとすれば、その理論モデルを構築するにあたって、システムズ・アプローチが必要になる。家族関係は、孤立して存在するのではなく、他の社会的な仕組み（たとえば、学校、マス・メディア、保健医療システム、職場、自治体、政府など）と相互にかかわりをもっているからである。

家族の社会的生態が、次第に家族問題の主要な決定因であると言われるようになってきている。たとえば、青年期の適応障害は、その典型的な例である。青年期の不適応が家族関係面の歪みによってひき起こされるだけでなく、学校・地域社会と家族の関係の問題からもたびた

び生じているからである。

家族関係、家族と他の社会システムとの関係にみられる力動性が、家族心理学の中心的な課題になるであろう。それには、家族を力動的で多面的な全体として把握する必要がある。家族心理学ではまた、家族の発達過程に関する生涯発達の取り組みがなされねばならない。

家族心理学の主要課題

さて、ここで、家族心理学の定義および主要課題を暫定的に記述しておくことにしたい。

家族心理学 (family psychology) とは、心理学的方法論に準拠し、家族にかかわる心理学的諸現象を研究する科学である。具体的には、親子・きょうだいなどの家族内の関係、結婚や離婚に関する心理-社会的な事柄、家族の形成・発達・崩壊などの家族心理過程 (family process) が、研究課題になるであろう。現代家族が直面する危機の克服を目指して、家族心理学は、次の2つの主要課題に取り組むことになる。

第1は、子ども（あるいは配偶者）の問題行動や心理面の症状、夫と妻の葛藤、老親との不和などの問題をもつ家族に対する心理-社会的な援助法（ファミリー・カウンセリングあるいは家族療法）の理論と実際に関する研究である。

第2の主要課題は、家族の健全な発達を促進する心理-教育的な方法の理論と実際に関する研究である。

子どもや夫婦の心理面の問題は、これまで児童心理学、青年心理学、臨床心理学等の分野で取り扱われてきている。しかし、おおくは個人に焦点が合わされ、家族はその背景または環境として考察される場合が通例であった。児童や青少年の行動問題に取り組むカウンセリング（臨床心理学の1分野）の発展にともなって、子どもの問題行動は、家族関係の病理をしめす症状である場合がおおいことに気づかれるようになった。家族全体の構造と機能を見つめ、心理的な援助を積極的におしすすめるファミリー・カウンセリングあるいは家族療法が、重く見られるようになったのである。

家族心理学と近接領域との関係

家族心理学はまた、ある意味で学際的な科学ということができる。いま述べた臨床心理学のなかでも児童・青

少年の適応障害に取り組む分野では、家族システムを学校・地域社会といった社会システムと統合的にみなければ的確な対処ができないことが知られている。発達心理学では、生涯発達が重視されるようになり、その拠点の1つとして家族が考慮に入れられるようになってきている。さらに、教育心理学では、ますます家庭における人間形成の大切さが強調されてきている。新しい視点からの家族教育・家庭教育がいま要請されている。社会心理学の分野では、小集団内の人と人の相互作用を研究する集団力学は、もともと家族関係の場のダイナミックスを重く見ており、その知見は家族心理学にとって役立つはずである。

A 社会心理学領域、とくに集団力学との関連性

現代の心理学者のなかで場の理論の立場から、家族関係を全体的にとらえようとしたのは、小集団の人間関係を実証的に研究する集団力学 (group dynamics) の創始者 Kurt Lewin である。Lewin は早くも、1940年に「結婚生活における葛藤の背景」という論文を発表しているが、Lewin によると、家族は典型的な小集団であって、その構成員同士の交わりが他のどんな集団よりも相互依存的事であること、人間生活に基本的な価値観（なにが、いちばん大切な）によって結ばれていること、しかも人と人の距離がもっとも近接している集団である (Lewin, 1954)。

夫婦間の対立や葛藤を引き起こす条件として、Lewin が挙げているのは、まず第1に、衣食住や性愛、安全などの基本的な要求を充足する際に生じる緊張である。第2に、物理的あるいは（および）心理的に自由な空間が少なければ、緊張が生じやすい。とりわけ、家族内部に禁止事項やタブーが多ければ、緊張はいつそう強くなる。さらに、外部との境界の壁が厚くて、内外の疎通が困難だったり、内部の役割が固定化または硬直化していて、束縛が多ければ、家族内の緊張はもっとも強くなるであろう。

Lewin は、このような家族緊張に関する分析にもとづいて、家族関係においては相互依存性と相互同一化がことさらに重要であることを示唆している。家族には、個人の要求と、集団としての家族の要求を効果的に調整する機能が求められる。家族の一員（例、幼児）が援助を必要とする時には、個人（例、父親または母親）は自由を一時的に放棄して、支援しなければならないのである。

集団力学は、Lewin 以後、実験室的な研究に傾斜したので、家族ダイナミックス（家族力動とも言う）を扱うことは減少しているが、家族心理学の研究では Lewin の先駆的な研究に学ぶところが多い。

B 臨床心理学領域における実践的研究との関連性

臨床心理学領域における実践的な研究が、家族心理学誕生の母胎になったといわれている。その成立過程については次節で取り上げたい。20世紀前半においては、S. Freud の精神分析的な取り組みが徐々に心理臨床事例に試みられはじめてきた。第2次大戦後には、Carl Rogers のクライエント中心のカウンセリングあるいは B.F. Skinner のオペラント技法による行動療法などが心理療法・カウンセリングの分野に参入し、心理面の問題をもつクライエント個人に対する援助効果はますます向上してきてきたのである。精神薬理学の進歩もまたいちじるしく、向精神薬の開発がすすみ、個人治療の成果も目立つようになってきた。また、病院や児童青少年の保護福祉施設でも心理学・社会学・教育学等の人間科学専攻者が心理療法や生活指導に当たるようになり、個々の子どもに対する治療教育効果は以前よりも際立ってきたのである。しかしながら、社会的な適応力を快復した子どもが病院や施設から帰宅すると、間もなく問題を再発させることに気づかれ始めた。かくて、臨床心理専門家たちは、家族がもつ病原性に直面することになったのである。

教育相談所・外来診療所などの心理臨床家や精神科医たちは、クライエントや患者のなかに向精神薬あるいは面接治療では改善されない青年期の適応障害者がいることに気づき、家族ぐるみの治療を企てるようになった。1950年代後半のことである。

青年期の適応障害事例に取り組んでいた心理臨床家たちは、家族関係の病原性が家族全体への治療的介入によって改善されるとき、2次的効果として子どもの問題行動が消失または軽減される事実を見出すようになった。その後30年余の間、家族へのトータルな治療的援助がさまざまな理論的オリエンテーションのもとに実践され、研究者の数も増加し、家族心理学の成立基盤が徐々に確固としたものとなったのである。

家族療法が重視するシステムズ・アプローチは、いまや臨床心理学実践においても注目されるようになってきている。今日では、青年期の適応障害に関する家族心理学的研究が、臨床心理学の発展に寄与するほどの影響を与えつつある。

C 発達心理学領域の研究との関連性

発達心理学は、受胎から死に至るまでの生体の心身の形態や機能の成長・変化の過程、これに伴う行動の体制化の様相、変化を支配する機制や条件などを解明し、発達にみられる法則の定立を目指している（新心理学事典、平凡社、1981 691-696ページ）。1950年以後の、いわば20世紀後半における発達心理学的研究は、次の3つの軸に沿って進行していると言われる。第1は、自然観察から、実験的分析および比較的方法へと研究法が変化した

こと。第2は、発達標準の記述や設定から、発達過程の因果的説明へと研究目標が推移したこと。第3は、「遺伝か環境か」から、「相互作用はいかに営まれるか」へと主要課題が変化したことであるとされている。

筆者の臨床的観点から言えば、第2の軸即ち個人の発達過程の因果的説明にもっとも関心がある。しかし、発達心理学はあくまでも個体の発達研究が主眼目であるため、家族や家族関係はその背景的要因として取り扱われているにすぎない。

人間の心身の健康を重くみるのであれば、個人の発達だけでなく家族関係の発達が等しく研究されるべきであろう。この課題は、伝統的な発達心理学の対象というよりも、新たな家族心理学が取り組むべきものである。家族心理学においては、家族関係の発達、即ち家族過程の諸段階を的確に記述することが求められている。この線に沿った研究は、かならず個体の発達心理学に寄与するところが大きいはずである。

さて、家族には、その生活自体に創造的な潜在力が内在している。しかし、この潜在力が望ましくない方向に作用すると、成長を妨害する力になったり、関係を破壊する力になってしまうことがある。家族ダイナミックス (family dynamics) とは、家族の人々の間の心理-社会的な交わり (psycho-social transaction) にみられる力の関係を言うのであるが、一般に家族ダイナミックスは、結婚に始まり、時とともに変動しながら、一定の経過(家族過程: family process) をたどりながら変化するものである。

結婚の初期には、夫と妻の絆を強めるための努力がなされ、凝集力がしだいに強化される。やがて第1子が生まれると、三者関係のダイナミックスへと大きく変化する。夫と妻の絆が弱ければ、時には三者関係の均衡が失われ、母子の密着が目立つようになるかもしれない。さらに、家族に対する夫の帰属性が稀薄となれば、夫と妻の間に緊張が生じることになるであろう。

家族ダイナミックスの発達にかかわる要因には、次の3つを挙げることができる。

- ① 夫婦の連帯性(夫婦連合ということもある)～夫婦の相互的、相補的な関係にみられる絆
- ② 子どもの養育と社会化～子どもの発達に相応する必須の行為(親行為=ペアレンティング)
- ③ 家族が直面する危機(家族危機という)への対応能力

ファミリー・カウンセリングが必要な家族をみると、家族危機に際して的確な対応ができなかったと判断される場合が多い。家族危機は、どの家族にも必然的な発達の危機と、偶発的な状況的危機とに大別できる。これら

2種類の危機が複合した場合には、解決が一段と難しくなりがちである。

家族が直面する発達の危機は、家族過程の各段階にみられるが、子どもが思春期・青年期になったときに生じる親子の衝突はその典型例である。家族が青年期の子を家庭内に閉じ込めようとしたり(求心的家族パターン)、子どもに友人の輪の中に参加する力が欠けていたりすると、家庭内暴力が生じる可能性はいっそう大きくなる。家族に凝集力が不足しており、子どもにとって魅力がなければ(遠心的家族パターン)、家出して街角の群れにまぎれこむことは、たびたび観察される現象である。しかし、大方の家族では、親子の世代間の葛藤や対立を克服して、子どもの自立を促進するはずである。

家族は、社会的経済的な変動による倒産や失業、災害や事故、遺棄や虐待などの予期せぬ状況的危機に遭遇することもままある。たとえば、父親が交通事故による重傷で入院すれば、その家族の構造や機能は一時的にしても変化するであろう。危機への対応の仕方によっては、家族はいっそう強固な絆をつくりあげることもあるし、間もなく解体していく場合もある。

D 教育心理学領域とくに家庭教育に係わる心理学との関連性

教育心理学は、教育活動について心理学的に研究し、教育実践上の課題を解決するために、よりよく適用される心理的知見とよりたかい効果をあげうる心理的技術を提供する学問として定義されている(前掲、心理学事典、156-159ページ)。その主対象は、発達・学習・評価・適応であるとされている。また、教育活動は家庭・学校・地域社会などの生活の各領域で行われているが、学校教育に対比するものとしての家庭教育という言葉は、明治20年頃より、「親が子どもをしつける営み」という意味で用いられてきている。換言すれば、子どもが乳児期から成人して巣立つまでの間、親がその子どもにかかわる教育的な営みである。しかしながら、現代の家族がおかれている社会的状況にあっては、子育てを主とする家庭教育だけでは、心身の健康の維持増進と親子ともどもの人間性の発達には役立たなくなっている。家族を構成する人々が健康で幸福な家庭生活を営むための『家族教育』が必要になってきている。この課題に取り組むのは、新しい視点の家族心理学がもっともふさわしいように思われる。

家庭の崩壊を予防し、家族の人々の健康を維持増進するような家族教育に対する社会的な要請は、年ごとにたかまってきている。子守りの経験の乏しい若い親たち、子育ての助言者としての祖父母のいない核家族の増加が、親教育の必要性をうみだしてきた。育児書や思春期の子

どもとの交わり方などを述べた本が多数出版されているが、子育てや家族関係はまさに体験なのであるから、本を読むだけでは十分ではないし、文字情報間の矛盾に困惑することもままある。それに、家族教育や親教育では、身をもって学習するスキル・トレーニング（技能訓練）が必要である。

保健所で実施されている（母親教室、父親教室、両親教室と呼ばれている）産前教育では、講義に加えて沐浴の実習が行われている。産後の教育では、離乳食指導が実技をまじえて実施されている場合もある。

小中学校のPTAでは、家庭教育学級が開かれているが、家族心理学的な知識と方法を取り入れることによって、もっと魅力的になるはずである。

家族教育には、基本的には次の2つの課題が取り上げられるべきである。

第1に、個人と家族の発達段階に関する情報である。夫婦の相互理解と問題解決、それぞれの自己実現の支援、子どもの成長に応じたペアレンティングのあり方などが、学習対象になるであろう。

第2に、個人および家族が危機に直面したとき、いかに対応するかの方法に関する課題である。危機対応の仕組みを理解し、対応能力を増進するとともに、対応のレパートリーをふやすようにすることである。

家族教育のなかで、ことさらに重要なのは親教育である。寺田晃は、問題行動の子どもの発生を未然に防ぎ、かつそうした子どもの現実を改善するための、親教育の方法の指針（前提的原則）として、次の7つの事項をすくなくとも考慮すべきだ、と述べている（寺田，1987，13-36）。

- ① 親教育の早期展開
- ② 両親の同時的面接による治療の展開
- ③ 親および家族の自己回復力の発揚化
- ④ 受容・共感の対応
- ⑤ 対象の診断・判断の明確化
- ⑥ 教師との緊密な連携化
- ⑦ 大人自身の生活態度の調整化

E 社会学・人類学などの近接領域との関連性

家族に関する科学的アプローチは、19世紀中葉に始まったといわれている。社会学者山根常男は、この家族研究には、次に挙げる3つの源泉があるとしている（山根，1972）。

第1は、生物進化論の影響をうけたアプローチで、家族の歴史の変遷に関する大胆な仮説をめぐる研究で、家族進化論と呼ぶような人類学的な取り組みである。未開民族の現地調査にもとづいて家族進化図式〔乱婚→血縁家族→プナルア家族→対偶家族→一夫一婦家族〕を提示し

たMorgan, L.H.、一夫一婦制の普遍性を主張したWestermarck, E.などは代表的な研究者であった。

家族研究の第2の源泉は、社会学の成立にともなって、その学的体系を記述するなかで他の社会集団との比較において家族が論じられている場合である。Comte, A.やToennies, F.の著作では、家族は副次的に論じられているといわれる。

第3の源泉は、社会改良的な関心のもとに19世紀中葉に行われた家族生活の実態調査である。LePlay, P.F.は『ヨーロッパの労働者』（1855年）のなかで、家族機能の面から、3つの家族類型〔父権的家族／系譜的家族／不安定家族〕を示したといわれている。

さらに、山根によれば、家族研究は20世紀に入って次のような変化をみせたのである。第1に、研究の関心が過去の家族から現在の家族に移行したこと。第2に、家族研究の舞台がヨーロッパからアメリカに移ったこと。第3に、集団としての家族の研究が始まったこと、である。社会経済的な変動から生じる社会的危機に対応しながら、20世紀の家族研究は、立場を異にするふたつの学問群を通じて発展してきたとみなし、山根は次のように主張している（山根，1972，3-7）。

「1つは集団ないしは文化を出発点とする学問、とくに社会学・文化人類学であり、いま1つは個人を出発点とする学問、とくに精神医学・心理学である。社会学の家族研究は多かれ少なかれ社会改良の関心に基礎づけられ、たとえば日本の家族、農村の家族、中間階層の家族、あるいは外国の家族というように、全体社会・地域社会・社会階層あるいは文化・下位文化などにそれぞれ共通する家族や家族関係の一般的性格を明らかにしようとする。これに対して精神医学や心理学の家族研究は臨床的関心に基礎づけられ、社会や文化に一般的な家族よりは、むしろ個々の家族の分析から出発し、非行・神経症・精神分裂病などの家族の特徴を一般化しようと試みる。」

最近の家族社会学的研究の特徴は、家族の構成・規模などの外的形態に関する研究よりも、家族の内部構造としての役割構造・権威構造・勢力構造などの分析に焦点が移行してきていることであろう。さらに、老人・共働き・離婚などの、いわゆる家族問題に対する社会学的方法による実証的研究も熱心におこなわれている。

家族内部の対人関係を含む家族ダイナミックスの研究は、社会学的方法論によるよりも、むしろ家族心理学的アプローチによっていっそう充実したものになるであろう。そうすることによって、社会学のアプローチと心理学的アプローチの統合による家族に関する一般理論の構築可能性が一段と強められるように思われるのである。

2. 家族心理学の成立過程

家族は、本来人間が自分の子孫を産み育て、人間性を培い、さらに価値や財産を次の世代に伝えるためにつくられたもので、時や所がことなればさまざまな形をみせるにしても、歴史の風雪に耐えて維持されてきた小集団である。家族のなかで生まれ、死ぬ存在としての人間には、家族はきわめて重い意味をもつ。たとえ産院で生まれ、病院で息を引き取ることが多くなっているにしても、つねに家族の人々からの心理面の支援が安らぎの源泉となるであろう。

老若男女といった年齢や性の異なる人たちから構成される家族は、人間という種にとって基本的な必要を満たすものである。身体面の世話、感情面の支え、あるいは知的な交流などの要求や、子どもの養育や行動の制御、意志の疎通や性愛などの欲求は、基本的には家族の関係を通じて充足されるものであろう。

家族内の人々の交わりが調和のとれたものであれば、心理面の安定と健康な状態が増進される。家族には、その生活自体に大きな潜在力が内在していると考えられる。しかし、この創造力と等しいほどの、おそろべき破壊力が家族関係のなかでつくりだされることが、ようやく認識されるようになってきている。とくに、家族関係の病理に対する援助的な介入として企てられたファミリー・カウンセリングや家族療法の発展によって、あらためて家族機能の見直しが求められるようになったのである。

子どもや大人の心理面、行動面の異常あるいは逸脱、それに青年期の適応障害に関する諸現象の解明とそれらに対する援助的介入を目指す臨床心理学の分野では、その臨床実践の拡大深化にともなって、家族関係に対する心理学的な再検討が求められるようになってきている。たとえば、子どもが治療教育施設でかなり行動面の安定性を回復したので、家庭に帰されるようになった場合を取り上げてみよう。このような事例では、帰宅後数週間を経過しないうちに再発し、再収容される事例がたびたびあることに気づかれ、家族になんらかの病源性があるのではないかと疑われるようになったのである。また、精神分裂病者が家族のなかで、大切な役割を担い、家族の解体を予防しているような事例が、1950年代に発見されたのである。さらに、妻の神経症が夫によってよく支えられているために、心理療法が効果をあげない事例があることも報告されはじめた。1950年以前には、心理的な問題はあくまでも、患者あるいはクライアントの個人の精神病理によるものとする見方が支配的であったのである。家族関係の問題は、二次的で、環境要因の一部と見られていたにすぎない。この立場から導かれる援助法は、問題をもつ個人に対する治療教育と、その効

果を側面から促進する環境調整としての家族指導とに分けられる。このような二次的な家族へのかかわりは、医療の伝統的な見方に近い。しかし、身体疾患はともかくも、心理面の問題にあつては、クライアント本人を家族からきり離してみることは、かえって援助の方針を誤らせてしまいやすいことが知られるようになってきたのである。問題をもつ個人の病理は、家族病理の1つの症状にすぎない場合が多いからである。そこで、クライアント本人だけでなく、家族全体が援助の対象として取り組まれるようになったわけである。

家族内部の関係は、一般にアウトサイダーには計り知れない私的な交わりと考えられている。それに、研究のために内部に入り、参加観察を試みようとしても、体よく追い出されてしまうことが少なくない。家族集団は、他の集団よりも、侵入者に対する抵抗と排除圧力が一段と強いことを特徴としている。それゆえ、家族の心理やその交わりの特徴、いわゆる家族ダイナミクスへの接近は、長い間敬遠されてきたとみられよう。これが、家族心理学の成立を遅延させた主要な原因の1つであるように思われる。

発達心理学の分野では、臨床心理学よりも早く、乳幼児期から青年期にいたる人間性の発達に関する研究を通じて、つねに家族のもつ機能に注目してきている。親から子への知能や才能の遺伝的研究をはじめとして、躰の方法とか同胞競争あるいは出生順位による性格特性といった諸問題に対する調査研究が続けられてきている。子どもの発達には、家族関係の安定性に左右される面があることも知られるようになった。また、子どもとの接触時間がふえた専業主婦の母親たちの児童発達に向けられた関心も大きくなり、研究者が家族のなかにはいつて参加観察する機会も以前よりは多くなったのである。家族全員との面接データが入手できるようになったので、家族のダイナミックな交わり方を解明できるようになり、子どもの発達におよぼす家族関係の影響力もまた一段と確実に把握できる可能性がでてきたのである。

このような研究動向の流れにそって、家族の関係を親子、夫、妻などの構成要素に分解せずに、1つの統合体として把握することを通して、つまり家族を1つのシステムとみなして、その構造と機能に対する心理学的な取り組みをおこなう家族心理学が1980年代に入って確立されてくるのである。

家族心理学は、前述したように心理科学のなかでももっとも最近認知された課題領域である。しかし、家族関係に関する取り組みの歴史はけっして短いものではなく、夫婦親子同胞などの家族関係に生ずる葛藤とその解決については、おそらく人間が家族という形をつくりだ

して以来、さまざまな取り組みをしてきているように思われる。とはいえ、これらの取り組みのなかには、たとえば、家族関係に関する宗教的な教えなどのように、経験的な事実によって価値が認められる場合もあるが、科学的な実証に欠けているものが多いとみなしなければならない。

青年期の適応障害などのような、心理面の問題に対して科学的な解明に最初に取り組んだ人物としては、Freud, Sigmund の名を挙げることができる。フロイト理論については、今日ではさまざまな批判があるものの、当時もっとも重視されていた自然科学的な線形因果関係論に厳密に準拠し、個人の精神病理が幼児期の家族関係にその源があるという発見は、その後の家族心理学的研究を刺激するものであった。

現代の家族心理学は、精神分析系統の理論よりも、システムズ・アプローチに準拠することが多いけれども、それにはフロイトと彼以後の研究成果のなかでシステムミックスな枠組みに包括されうるものは取り入れられている。また、現代の精神分析研究者として著名な Erikson, E.H. の理論は、正統派精神分析の流れに立つとは言えるけれども、基本的にはシステムズ・アプローチのなかに位置づけることは、けっして誤りであるとは思われないのである。

家族心理学の成立過程を、これまでの主要な著書論文を通じて提起された諸概念の類似性と特異性をもとにして段階分けを試みたところ、第1期は最初の40年とし、その後は20年ごとに区切るのが適当に思われる。(紙幅の都合により、その詳細は省略)

- 第1期：1900年～1940年頃 精神力学・集団力学の創始期
- 第2期：1940年～1960年頃 母原病の発見とそれへの批判
- 第3期：1960年～1980年頃 システムズ・アプローチの多彩な開花期
- 第4期：1980年～現在 諸理論の統合と家族心理学の確立期

第1期には、Freud の精神力学観による家族の病源性の発見と Lewin の集団力学的研究にもとづく家族関係の葛藤の説明が、この時期を特徴づけるものであった。

児童・青少年に対する相談指導活動が普及するにつれて、心理面・行動面の問題をもつ子どもと母親の関係が関心の的になってきたのは、1940年代である。欧米では、母親の過保護や放任が直接的に子どもの適応障害をひきおこすとみる、いわゆる母原病の概念が強調されたのである。わが国では、父親の頑固で非民主的な言動が非行少年をつくりだすといった見解などは、昭和30年代の非

行予測研究によるとはいえ、かたよった見方であった。いずれの場合も、母子関係や父子関係などの家庭内の二者関係 dyad が精神病理をうみだすとするもので、40年代と50年代に際立ってみられたものである。

50年代に入ると、家族を1つのまとまりのある単位あるいは集団とみなして、心理療法的な援助を試みる人々もでてきた。とはいえ、まだこの時期は家族をシステムとみる面では萌芽的な段階であった。家族心理学成立過程の第2期には、家族関係のなかの病源的な2者関係に焦点が当てられた時代とすることが出来る。

1950年代に始まった家族関係を全体的に把握する動向は、1960年代にはいっそう進展して、家族関係に関するさまざまな理論と実際面の活動が報告されるようになる。そして、1970年代にはいると、一般システム理論・サイバネティックス理論などを取り入れたシステムズ・アプローチが、従来からの精神分析的なアプローチよりも、一段と重く見られるようになってくるのである。家族を、全体としてまとまりのあるもの family as a whole と見るよりも、1つのシステム family as a system とみなす考え方が家族関係研究の新しい地平を切り拓くことになったわけである。家族心理学成立過程の第3期には、米国を中心に西欧社会では、家族の危機に直面し、それと積極的に取り組むなかで、次々に新しい概念や考え方が提起されてきている。

1980年から現在までの10年余の間に(家族心理学成立過程の第4期)、欧米においては、家族療法やファミリー・カウンセリングが、ますます普及し、研究団体の新設や関係学術雑誌の刊行なども盛んになってきている。

わが国では、1980年代に入って、家族療法に関心を示す心理臨床家が漸増しはじめ、1981(昭和56)年9月には、日本家族心理学研究会が創設された。1981年9月に開催された日本心理学会第45回大会(日本女子大学主催、杉溪一言委員長)では、シンポジウム「家族臨床心理の現状と展望」が、また1982(昭和57)年10月には日本応用心理学会第49回大会(国際商科大学主催、安倍淳吉委員長)においてシンポジウム「家族臨床心理の諸問題—心理学は家族を援助できるか」が、多くの参加者を集めて開かれた。両シンポジウムで発表された主要論文は、それぞれ日本家族心理学研究会の機関誌「家族心理学年報」第1号(1983年)、第2号(1984年)に掲載された。

日本家族心理学研究会は、1984年3月に発展的に解散し、同年4月には、発達心理学・人格心理学・社会心理学・教育心理学等の諸領域で家族に関する研究をしている人々が参加して、日本家族心理学会を創設することになった。その主な理由は、心理学諸領域で家族に関する研究者がひとつにまとまることで、家族心理学の発展を

促進したいという意向が研究会会員のあいだに強くなったからである。精神保健の領域とは別に、児童・青少年の発達研究、老年期研究、家族と地域の関係に関する研究にたずさわっている心理学者が協力して、家族の健全な発達をめざす研究と実践が社会的にもとめられて来ているからでもある。これらの研究・実践を重視し、家族教育と家族療法を主要な対象とするのが、家族心理学である。

また、わが国では、ファミリー・カウンセリングの研修を設立の主目標とする日本家族カウンセリング協会が、1985年3月に発会式をおこなっている。同協会は、日本家族心理学会の家族療法研修部門をも担当し、今日までに既に20回をこえる研修会を開いている。

「家族心理学年報」は、1984年4月から日本家族心理学会の機関誌として続刊されることになった。1984年6月に日本女子大学主催で開催された日本家族心理学会第1回大会で報告された論文・シンポジウム内容等は、「家族心理学年報」の第3号(1985年3月)に、1985年9月に立教大学主催の第2回大会で報告された論文・シンポジウム内容等は、「家族心理学年報」の第4号(1986年3月)に、さらに、1986年7月に東北大学主催で開催された第3回大会で発表された論文・シンポジウム内容等は、「家族心理学年報」第5号(1987年3月)にそれぞれ掲載されている。

また、日本家族心理学会第3回総会では、新たに学術雑誌「家族心理学研究」の発行が決議され、1987年5月に第1巻第1号が発行された。かくて、日本家族心理学会は、「家族心理学年報」と「家族心理学研究」の2つの発表媒体を持つことになったのである。

因に、米国心理学会(APA)は、1984年8月の年次総会において、その第43部門として家族心理学会の創設を承認し、翌年には初代会長にKaslow, F.W.を選出した。米国家族心理学会は、1987年秋に、機関誌「Journal of Family Psychology」(編集者:Liddle, H.A.)を創刊している。

3. 家族心理学研究の現状と展望

—国際家族心理学会創設を巡って—

ファミリー・カウンセリングや家族療法に関する心理臨床家はともすれば事例中心の取り組みを重視し、一般法則の発見を目指す実証性に欠ける傾きがある。家族療法学が重視する循環的生態学的な認識論にもとづくシステムズ・アプローチを強調すれば、心理学における伝統的な研究法のおおくが準拠する因果関係論を線形認識論として放棄せざるをえなくなる。しかし、家族関係をはじめ家族心理現象の理論的、実際的な理解には、システ

ムズ・アプローチとともに、伝統的な取り組みもまた必須である。クライアントが体現する心理的な問題は家族システムの問題であるとともにクライアント個人の問題でもあるからである。

このような反省のもとに、伝統的な心理学研究と心理臨床的研究を統合し、家族心理現象に取り組む、新しい領域として家族心理学が創設されることになったのである。上記の反省を具体化するために、日本家族心理学会では機関誌の編集方針として、原著論文A(実験調査による実証的研究)と原著論文B(臨床的事例研究)のバランスを配慮することになっている。

家族心理学の発展にとって、1990年はある意味で画期的な年であった。7月に京都で開かれた第22回国際応用心理学会議において、臨床/コミュニティ心理学部門での基調講演1, シンポジウム1(下記)を通じて家族心理学に関する最初の国際交流が行われた。

7月24日 KEYNOTE ADDRESS

David H. Olson : Family Stress and Family Health - A Multi-system Perspective.

7月26日 SYMPOSIUM

Psychological Approaches to the Family Problems in East and West.

Organizer : T. Okado (Japan)

Chair : E. Sato (Japan)

Speakers :

F. Kaslow (U.S.A.) : Family Problems and Psychology in Modern Society.

K.A. Schneewind (FRG) : The Family as a Context of Individual Development.

M. Cusinato (Italy) : Development of Family Psychology in Italy during the Eighties.

N. Kuniya (Japan) : Families in the Context of Cultural Change Focusing on Japanese Families.

L. L'Abate (U.S.A.) : Family Psychology and Therapy - Comparisons and Contrasts.

Discussants :

N. Hiraki (Japan)

A.T. Yeo (Singapore)

K. Kameguchi (Japan)

このシンポジウムの企画の趣旨は、急速に変動する世界の中で、おおくの家族が直面する心理的な諸問題への取り組みを通じて成立した家族心理学の概念を明確にすることにあった。

7月25日には国際家族心理学会(IAFP: International

Academy of Family Psychology) の創設が宣言された。IAFP については、1988年8月、米国ジョージア州立大学の Luciano L'Abate が創設を呼び掛けたことに始まり、翌89年6月にはミュンヘン大学での委員会において創設に関する事項が協議された。

国際家族心理学会の目的は、次の5項に集約される。

- (1) 全体としての家族並びに家族内の個人についての、さまざまな形態とライフ・スタイルの構造と発達に関し、心理学的な観点からの基礎的及び応用的研究を進展させる。
- (2) 家族心理学の分野における科学者＝実践家モデルを促進する。
- (3) 家族心理学及び家族介入における専門的かつ高度な訓練を、科学的原則及び実証的研究に基づいて推進する。
- (4) 多文化的視点から比較文化的な研究や介入を促進する。
- (5) 家族心理学者間の国際的な研究交流及び連絡網づくりを推進する。

全体集会としての国際会議は、4年に1回開かれることになった。7月28-29日に東京で開催される第1回国際家族心理学シンポジウム(下記)を第1回国際家族心理学会大会とすることに決定し、第2回大会は国際家族年の1994年7月にイタリアのパドヴァ大学で開かれることが承認された。

なお、国際家族心理学会の役員は次のとおりである。また、会員資格については、L'Abate の発議のもとに家族心理学分野における教授級の研究業績のあるものとされ、かなり厳しいものになった。

President : T. Okado Japan

Past President : L. L'Abate U.S.A.

Vice President : K.A. Schneewind Germany

Treasurer : M. Cusinato Italy

Secretary : K. Kameguchi Japan

National Representatives :

U.S.A. F.W. Kaslow

Japan N. Kuniya

Spain Roberto Roche-Oliver

Israel Esther Halpern

Canada Esther Gelcer

New Zealand Johannes F. Everts

7月28-29日には東京・昭和女子大学グリーンホールにおいて、日本家族心理学会主催、日本学術会議後援のもとに第1回国際家族心理学シンポジウムが8か国から270名余の参加者によって開かれた。2つの基調講演及び

6つの課題報告の題目・演者は次のとおりである。

KEYNOTE ADDRESSES :

L. L'Abate : On the International Academy of Family Psychology

E. Murakami : Changing Families and Psychology in Japan

LECTURES :

L. L'Abate : Some Epistemological Issues in Family Psychology

F.W. Kaslow : Divorce Therapy and Mediation for Better Custody

T. Okado : Perspectives on Family Psychology in Japan

D.H. Olson : Family Circumplex Model - Theory, Assessment and Intervention

K.A. Schneewind : Theories and Techniques of Family Psychodiagnostics

M. Cusinato : Is There a Psychology of the Healthy Family ?

このシンポジウムで発表された論文は「家族心理学研究」第4巻、特別号(英文)に収録されているので参照されたい。

おわりに

冒頭で述べたように、家族心理学は心理科学のフロンティアなので、まさに発達途上の領域である。その背景には、第2次世界大戦後に生じた急速な社会的な変動に伴った家族問題の諸現象がある。家族療法やファミリー・カウンセリングにかかわる臨床心理学者たちが次第に増加し、システムズ・アプローチによる家族心理現象の把握と介入が実践された。さらに、伝統的な心理学の研究者のなかにも、臨床家とは違った視点から家族研究に取り組むものが、とくに欧州を中心に増加してきている。日米では、家族を重視する臨床心理学研究者が家族心理学の成立に寄与してきているが、最近では一般法則定立を目指す伝統的な心理学の取り組みをことさらに重くみる人々が家族心理学の発展に参画し始めている。家族療法の分野ではいまなお、実践重視の巨匠とその追従者集団が実証的な効果研究が不十分なままに行われているのは、決して健全とは言えないのである。ちょうど教育心理学の分野でもっと事例研究を取り入れるべきだという主張があるように、家族心理学の領域においてはもっと実証的研究に取り組まなければならないのである。

国際化社会の今日においては、生活の基盤である家庭及び家族関係にかかわるさまざまな問題解決に衆知を集めることが求められている。家族心理学研究者の国際

交流を促進する国際家族心理学会の創設によって、家族心理学が社会的要請に応えると同時に、心理科学の進展に貢献することができれば幸いである。

文 献

- アメリカ夫婦家族療法学会 日本家族心理学会 (訳編)
1986 家族療法事典 星和書店
(American Association for Marriage and Family Therapy 1984 *Family therapy glossary*. Washington, D. C. : AAMFT)
- Ashby, W. R. 1956 *An Introduction to cybernetics*. London : Methuen.
- Bateson, G., Jackson, D., Haley, J. and Weakland, J. H. 1962 A note on the double bind. *Family Process*, 2 ; 154-161.
- ベイトソン G. 佐藤良明 (訳) 1982 精神と自然—生きた世界の認識論 思索社
(Bateson, G. 1979 *Mind and nature - a necessary unity*. New York : E. P. Dutton)
- ベイトソン G. 佐伯泰樹・佐藤良明・高橋和久 (訳) 1986 精神の生態学 思索社
(Bateson, G. 1972 *Steps to an ecology of mind*. New York : Harper & Row.)
- Bowen, M. 1976 Family therapy and family group therapy. In Olson, D. (Ed.), *Treating Relationships*. Iowa : Graphic Publishing pp. 219-276.
- Coleman, S. B. (Ed) 1985 *Failures in family therapy*. New York : Guilford press.
- Cusinato, M. 1990 Is there a psychology of the healthy family ? *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol. 4, Special Issue, 77-93.
- de Shazer, S. 1982 *Patterns of brief of family therapy - An ecosystemic approach*. New York : Guilford Press.
- de Shazer, S. 1985 *Keys to solutions in brief therapy*. New York : Norton.
- Doherty, W. J. & Colangelo, N. 1984 The family FIRO model ~ a modest proposal for organizing family treatment. *Journal of Marital and Family Therapy*, 10 : 1 ; 19-29.
- Doherty, W. J., Colangelo, N., Green, A. N. & Hoffmann, G. S. 1985 Emphases of the major family therapy models ~ a family FIRO analysis. *Journal of Marital and Family Therapy*, 11 ; 3 ; 299-304.
- フィッシュ R., ウィークランド J. H. シーガル L. 鈴木 浩二ほか (訳) 1986 変化の技法—MRI 短期集中療法 金剛出版
- (Fisch, R. Weakland, J. H. & Segal, L. 1982 *The tactics of change doing therapy briefly*. New York : Jossey-Bass.)
- Fisher, L. 1976 Dimensions of family assessment—a critical review. *Journal of Marriage and Family Counseling*, 367-382.
- フロイト S. 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克身・高橋義孝・土居健郎 (訳編) 1969 フロイト著作集 全6冊 人文書院
- Fromm-Reichman, F. 1948 Notes on the development of schizophrenia by psychoanalytic psychotherapy. *Psychiatry*, 11, 267-277.
- Gurman, A. & Kniskern, D. (Eds.) 1981 *Handbook of family therapy*. New York : Brunner/Mazel.
- Haley, J. 1963 *Strategies of psychotherapy*. New York : Grune & Stratton.
- Haley, J. 1973 *Common therapy—the psychiatric techniques of Milton H. Erickson*. New York : Norton.
- ヘイリィ J. 佐藤悦子 (訳) 1985 家族療法—問題解決の戦略と実際 川島書店
(Haley, J. 1976 *Problem-solving therapy*. San Francisco : Jossey-Bass.)
- ヘイリィ J. 高石昇・横田恵子 (訳) 1988 戦略的心理療法の展開—苦行療法の実例 星和書店
(Haley, J. 1984 *Ordeal therapy*. New York : Norton.)
- 長谷川 浩 (編) 1988 講座家族心理学 6 生と死と家族 金子書房
- 平木典子 (編) 1988 講座家族心理学 2 夫と妻—その親密化と破綻 金子書房
- ホフマン L. 亀口憲治 (訳) 1986 システムと進化—家族療法の基礎理論 朝日出版社
(Hoffman, L. 1981 *Foundations of family therapy—a conceptual framework for systems change*. New York : Basic Books.)
- 星野 命 (編) 1989 講座家族心理学 1 変貌する家族—その実現と未来 金子書房
- Jackson, D. 1957 The question of family homeostasis. *Psychiatric Quarterly Supplement*, 31, 79-90.
- Kaslow, F. W. 1990 *Voices in family psychology*, Vols. 1 & 2. London : Sage Publications.
- Kaslow, F. W. 1990 Divorce therapy and mediation for better custody. *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 19-38.
- Keeney, B. & Ross, J. M. 1985 *Mind in therapy*

- constructing systemic family therapy. New York : Basic Books.
- 国谷誠朗 (編) 1988 講座家族心理学 3 親と子—その発達と病理 金子書房
- L' Abate, L. 1983 *Family psychology*. Washington, D. C. : Univ. Press of America.
- L' Abate, L. (Ed) 1985 *The handbook of family psychology and therapy*. Illinois : Dorsey Press.
- L'Abate, (Ed) 1987 *Family psychology II*. Washington, D. C.: Univ. Press of America.
- L' Abate, L. 1990 Some epistemological issues in family psychology. *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 9-18.
- L' Abate, L. 1990 On the International Academy of Family Psychology, *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 1-4.
- Levy, D. 1943 *Maternal overprotection*. New York : Columbia Univ. Prees.
- レヴィン K. 末永俊郎 (訳) 1954 社会的葛藤の解決—グループ・ダイナミックス論文集 東京創元社
- McGregor, R. et al. 1964 *Multiple impact therapy*. New York : McGraw-Hill.
- ミニューチン S. 山根常男 (監訳) 1984 家族と家族療法 誠信書房
- (Minutin, S. 1974 *Families & family therapy*. Cambridge : Harvard University Press.)
- ミニューチン S. 福田俊一 (監訳) 1978 思春期やせ症の家族療法—心身症の家族療法 星和書店
- (Minutin, S. 1978 *Psychosomatic families-anorexia nervosa in context*. Cambridge : Harvard University Press.)
- Murakami, E. 1990 Changing families and psychology in Japan, *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 5-8.
- Nichols, W. C. & Everett, C. A. 1986 *Systemic family therapy ~ an integrative approach*. New York : Guilford Press.
- 日本家族心理学研究会 (編) 1983 家族心理学年報 1 家族臨床心理の展望 金子書房
- 日本家族心理学研究会 (編) 1984 家族心理学年報 2 心の健康と家族 金子書房
- 日本家族心理学研究会 (編) 1985 家族心理学年報 3 家族カウンセリングの実際 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1986 家族心理学年報 4 ライフ・サイクルと家族の危機 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1987 家族心理学年報 5 親教
- 育と家族心理学 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1988 家族心理学年報 6 結婚の家族心理学 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1989 家族心理学年報 7 思春期・青年期問題の家族心理学 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1990 家族心理学年報 8 現代家族のゆらぎを越えて 金子書房
- 日本家族心理学会 (編) 1991 家族心理学年報 9 新しい家族の誕生と創造 金子書房
- 岡堂哲雄 1967 家族関係の臨床心理 新書館
- 岡堂哲雄 1976 心理学的家族関係学 光生館
- 岡堂哲雄 (編) 1978 家族心理学 有斐閣
- 岡堂哲雄 (編) 1987 ファミリー・カウンセリング 有斐閣
- 岡堂哲雄 (編) 1988 講座家族心理学 6 家族心理学の理論と実際 金子書房
- 岡堂哲雄 (編) 1989 家族関係の発達と危機 同朋舎
- 岡堂哲雄 1990 家族臨床心理の理論モデル 岡堂哲雄他 (編) 臨床心理学大系 4 金子書房 pp.41-82.
- Okado, T. 1990 Perspectives on family psychology in Japan. *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 39-54.
- Olson, D. (Ed) 1976 *Treating relationships*. Lake Mills : Graphic Publishing.
- Olson, D. et al 1982 *Family inventories*. Minnesota : Family Social Science.
- Olson, D. et al 1988 Circumplex models-systemic assessment and treatment of families. *Journal of Psychotherapy & the Family*, 4, No.1/2.
- Olson, D. et al 1989 *Families-what makes them work*. London : Sage Publications.
- Olson, D. 1990 Family circumplex model-theory, assessment and Intervention, *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 55-64.
- Papp, P. 1983 *The Process of change*. New York : Guilford Press.
- Satir, V. 1964 *Conjoint Family Therapy*. Palo Alto : Science & Behavior Books.
- Schneewind, K. 1990 Theories and techniques of family psychodiagnostics, *Japanese Journal of Family Psychology*, Vol.4, Special Issue, 65-76.
- Selvini-Parazzoli, M. et al 1978 *Paradox and Counter-paradox*. London : Jason Aronson.
- シャーマン R., フレッドマン N. 岡堂哲雄・国谷誠朗・平木典子 (訳) 1990 家族療法技法ハンドブック 星和書店

- (Sherman, R. & Fredman, N. 1986 *Handbook of structured techniques in marriage and family therapy*. New York : Brunner/Mazel.)
- Sieburg, E. 1985 *Family communication-an integrated systems approach*. New York : Gardner Press.
- ストロース M., ゲルス R., スタインメッツ S. 小中陽太郎 (訳) 1981 閉ざされた扉のかげで—家族間の愛と暴力 新評論
- (Straus, M. A., Gelles, R. J. & Steinmets, S. K. 1980 *Behind closed doors-violence in the American family*. New York : Doubleday.)
- 杉溪一言 (編) 1989 講座家族心理学 4 家族と社会 金子書房
- 詫摩武俊・依田明 (編) 1972 家族心理学 川島書店
- 寺田晃 1987 親は教育できるか—親教育の課題, 家族心理学年報 5 金子書房. pp.13-36.
- van Hasselt, V. B. et al (Eds.) 1988 *Handbook of family violence*. New York : Plenum Press.
- ウィークス G. R. ラバーテ L. 篠木満・内田江里 (訳) 1986 逆説心理療法 星和書店
- (Weeks, G. R. & L' Abate, L. 1982 *Paradoxical psychotherapy*. New York : Brunner/Mazel.)
- 山根常男 1972 家族の論理 垣内出版
- 山根常男 1986 家族と人格 家政教育社